

共同研究プロジェクト「東地中海地域における人間移動と「人間の安全保障」」（主査：黒木英充）（通算第17回・2008年度第1回研究会）

日時：2008年5月17日（土曜日）午後2時より午後5時30分

会場：AA研3階マルチメディア会議室(304)

報告

1) 黒木英充（AA研所員）

「19世紀シリアの都市をめぐる人間の移動と安全+プロジェクトの小括・展望」

2) 黛秋津（AA研共同研究員：東京国際大学非常勤講師）

「18世紀後半-19世紀初頭におけるロシアの地中海進出過程」

1) 黒木英充（AA研所員）

「19世紀シリアの都市をめぐる人間の移動と安全+プロジェクトの小括・展望」

<要旨>

本報告では、まず過去4年間の16回にわたる共同研究プロジェクト研究会・国際ワークショップの足跡をたどり、小括をおこなうとともに、今後1年間のプロジェクト活動の方向性について議論した。

小括と今後の方向性に関する議論は次の通り。

東地中海地域は、その古代からの長い歴史の中で、世界でも有数の活発な人間移動の舞台を提供してきた。（ここでいう人間移動とは、人間の空間的な移動を基盤としつつ、そこに人間の社会移動までもも拡張的に組み込んだ複合的概念であり、以前の「イスラム圏」に関わるAA研共同研究プロジェクトのテーマに依拠したものである。）海は移動の障害ではなくむしろ移動そのものの場であり、港湾都市が発達してきたし、また陸路も街道筋の駅制や宿泊施設などが整備されてきた。一方、東地中海地域は、イスラエル成立によるパレスチナ問題、レバノン内戦、クルド問題、ユーゴ解体・内戦などなど、民族・宗派対立と見なされる様々な紛争・問題の舞台ともなっている。単に「開放的で移動が多いからこそ摩擦も多い」といった理解ではなく、この相反する2面をどのように統合的に理解するのか、というのが本プロジェクトを開始したときの問題意識であった。

この点を確認した上で、19世紀シリアの都市アレppoを対象に、どのような人間移動の実態が観察されるか、そこで「人間の安全」はどのように問題にしうるか、について議論した。人間移動は恒常的移動（行政的、商業など経済的、巡礼など宗教的なもの）、長期的移動（移民・移住、社会移動としての改宗など）、突発的移動（戦役、騒乱、大地震、疫病による人口喪失・移住）といった類型で考察することが可能で、そのあらゆるレベルで安全（アラビア語で「アマーン」）が維持されるよう意識されていたことを指摘した。

それぞれの局面で、安全を保障する者/される者、何（いかなる危険）からの安全なのかを確定しつつ考察することが必要だが、その際に重要なのは「保護」（アラビア語で「ヒマヤー」）の観念である。イスラーム以前の時代から、遊牧民が自らのテリトリー内を通行す

る者（旅行者、商人、巡礼者）に対して一定の経済的対価と引き換えに「保護」を与えて安全を保障した契約関係、ならびに古代ローマの時代から地中海地域に特徴的に観察されたパトロン・クライアント関係における優者が劣者を擬制的な親族関係用語を用いつつ、そしてしばしば一定の経済的対価を（契約関係でなく）暗黙のうちに得ながら保護した関係を原型とする。これは上の人間移動の 3 類型の各局面で問題となった。たとえば、東方諸教会信徒のキリスト教徒がカトリック化した問題（教会合同）と、この「改宗」者に対するヨーロッパ・カトリック諸国の対応の問題は、本来彼らに「保護」を与える者たるスルタンから、ヨーロッパ側が「保護」する権利を密かに篡奪する動きとして捉えうる。こうした個人・宗派単位の保護の問題は、いずれ植民地時代において「保護国」という形で、西地中海のマグレブ地域でマクロに展開することになる。この点については、国家レベルに議論を接合させるのには慎重であるべきとのコメントも出された。

今後、こうした問題に目を配りながら、未発表の共同研究員による報告の研究会を秋に、そしてパレスチナ難民・ディアスポラ関係の小規模な国際会議を 2009 年 1 月に開催することを確認した。

2) 黛秋津（AA 研共同研究員：東京国際大学非常勤講師）

「18 世紀後半-19 世紀初頭におけるロシアの地中海進出過程」

<要旨>

東地中海世界にとって、歴史的にロシアの影響は、イギリス・フランスなどに比べればそれ程大きいとは言えないかもしれないが、しかしながら全く無視出来るほど小さくもない。とりわけ 18 世紀以降、ロシアがオスマン帝国や西欧諸国との政治的経済的関係を緊密化させてゆく中で、ロシアの地中海進出は徐々に進展し、18 世紀末には地中海世界においてロシアは欠くことの出来ない政治的アクターとなった。

17 世紀以前、ロシアにとって地中海は遠い海であった。この時期ロシアにとっての関心は、専らオスマン帝国内における通商活動と、聖地エルサレム巡礼の安全の確保に向けられ、前者は両国の最初の公式な接触がなされた 1492 年に、後者は遅くとも 1681 年のバフチェサライ条約によって達成された。17 世紀末に登場したピョートル一世の下、ロシアは急速に領土を拡大し、17 世紀末のカルロヴィッツ条約によって西欧世界に対する優位を失ったオスマン帝国を圧迫した。ロシアは 18 世紀に入ってから数度にわたりオスマン帝国と戦火を交えたが、1768 年の戦争でオスマン帝国に勝利し、1774 年のキュチュク・カイナルジャ条約によって、ロシア商船の黒海内の自由航行、および黒海・地中海間の自由通行の権利を得て、通商活動において地中海への進出を果たした。同時に、ロシアはこの条約によって、オスマン帝国内のあらゆる場所に領事・副領事を置く権利や、黒海を取り囲むワラキア・モルドヴァ、クリム、カフカースにおいても一定の権限を獲得して、黒海・地中海への進出の重要な一歩を踏み出した。同条約によってロシアがオスマン帝国内のキリスト教徒の保護権を得たとする説があるが、それは誤りであり、帝国内のキリスト教徒臣

民を保護するのは、ロシアではなくオスマン政府であったことは、指摘しておかなくてはならない。

ロシアの地中海進出にとっての次のステップは、18世紀末から19世紀初頭の時期であった。オスマン帝国にとって伝統的友好国であるフランスがエジプトに侵攻し、これに対してオスマン政府はイギリスと共に、長年のライバルであるロシアと同盟を結んだため、オスマン帝国をめぐる国際関係の枠組みはこの時期大きく変化した。オスマン政府は、ロシア艦隊と共同でフランス軍を攻撃すべく、同盟条約の中で、戦時に限りロシア軍事船のイスタンブル海峡通過を認め、ここにロシアは商船に加えて軍事船の地中海進出をも果たすこととなった。さらにロシアがオスマン軍と共にフランス軍から奪取したイオニア諸島は、1800年にイオニア共和国（七島共和国）としてオスマン宗主下で独立し、ロシア軍がその防衛を担うことになった。そのため、ロシアは地中海において軍事拠点をも獲得し、地中海世界におけるロシアの影響力はますます高まった。

しかし、オスマン帝国とフランスとの関係が正常化すると、ロシア・オスマン関係は次第に悪化し、1806年には戦争が勃発するが、そうした中1807年にロシアがフランスと結んだティルジット和約によってイオニアはフランス領となり、ロシアは地中海における軍事拠点を失って、ロシアの地中海進出は挫折した。その後19世紀を通じてロシアは、地中海の制海権を握ったイギリスと、オスマン帝国を挟んで対峙し、再度進出を目指して攻防を繰り返すことになる。